The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	報告 : 第25回 臨床哲学研究会
Author(s)	楠本, 瑶子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 37-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

報告　第２５回臨床哲学研究会

楠本 瑶子

４月に再開された臨床哲学研究会。今年度は４月・７月・10 月・１月と全４回開催される予定です。今回は７月９日に行なわれた第 25 回の簡単な報告をしたいと思います。

個人発表「病いと看護―本論の序に代えて」／博士後期課程 中西チヨキ

前半の個人発表では、患者が病いを受け容れるということや、それに対する看護について、またそれによって起こる患者の気づき・発見や自己変容について中西さんが発表されました。発表後の質疑では、「患者は病いや痛みを受容しなければならないのか」や「治癒困難な病とその他の病とでは大きく異なるのではないか」などの論点がフロアから挙がりました。

シンポジウム「高校での臨床哲学の試み―過去・現在・未来―」

後半のシンポジウムは三部構成で行なわれ、第一部では樫本直樹さんの紹介の下、會澤久仁子さんが大阪府立福井高校、紀平知樹さんが初期の私立洛星高校、また藤本啓子さんが兵庫県立須磨友が丘高校のそれぞれの取り組みについて発表されました。

第二部では中川さんがコーディネーターをされていた昨年度までの取り組みの紹介と、今年度洛星高校プロジェクトに関わっているメンバーによるワークショップが行なわれました。ワークショップでは、実際に今年度の洛星

高校の授業でも扱ったコミュニティボールを作るワークを、高校時代のあだ名や夢、「あなたはどうして生きている？」などの質問に答えながら参加者のみなさんに体験していただきました。

第三部では本間さんの進行役のもと全体討議が行われ、

- どういう問題があって何をしに行っているのか？
- 実践者は何を思って取り組んでいるのか？
- 哲学という経験と授業という形式はどうなじむのか
- ワークショップを経験してかつての経験者はどう考えたか？
- 大学生・大学院生が高校の現場に行って進行役をすることにはどういう意味があるのか？

など多くの論点がフロアから寄せられました。これに対し、現在洛星高校に関わっているメンバーの応答や今まで関わってこられた方々の答えもあり、高校での臨床哲学の取り組みについて活発な議論がなされました。

（くすもと　ようこ）